

山とスキー

第八十六號



札幌 山とスキーの會 發行

大正十二年七月廿七日第三種郵便物認可
昭和三年九月廿八日印刷納本

昭和三年十月一日發行
(一月一回)

◇すまりをて得を讀愛御の下殿宮父秩りよ號刊創は誌本◇

次目號六十八第

.....

記事

山に就いての感想

伊藤秀五郎

〔一〕

憶ひ出深かりしヒユツテンレーベン

廣田戸七郎

〔八〕

灰色の恐怖

〔三〕

老登山者の回想

〔一四〕

ロッグケビン及びカッターデ

其の建築法造作飾付及び家具の造方

伊藤虎夫譯

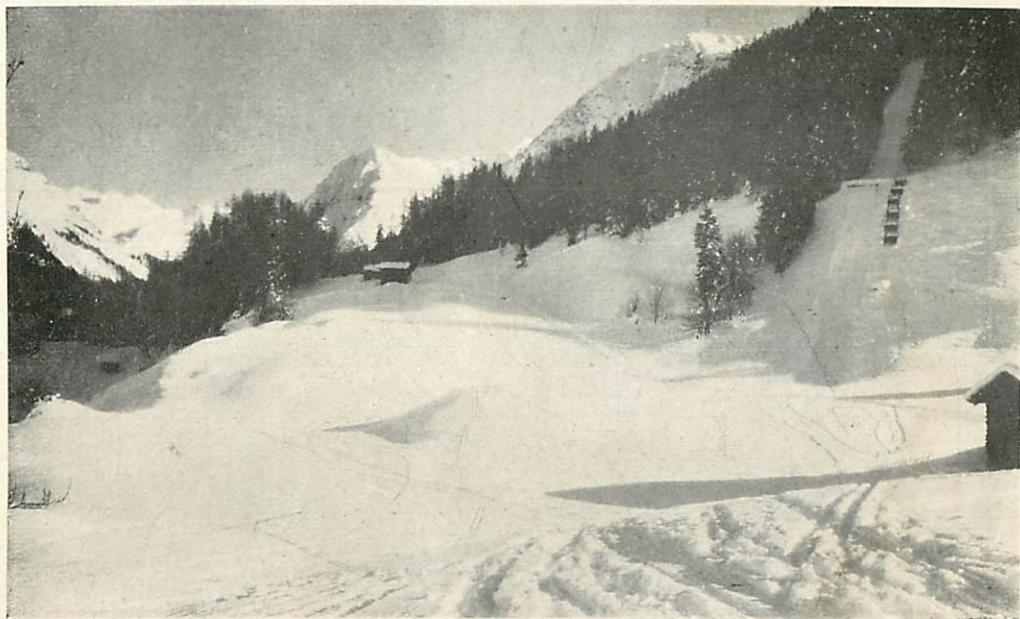
〔一五〕

山とスキー第七年目總目錄

寫真版

クロステルのセルフランガアシャンツエ
シエヌングスヒユツテの丘にて

昭和三年十月發行



クロステルのセルフランガアシャンシエ

地に潜入して了ふことは危険であると考へる。いふまでもなく、私達東洋人は先天的にかかる方向に趨走する傾向を多分にもつてゐる。だからといつて、それを民族的な人種的な性格として、少しの反省もなく肯定して了ふことは、現代の青年としては不満足を感じはしないであらうか。私達はさういふ傾向にもつと注意してもいいのではないであらうか。山登りのうへに於ても、更に之を自然觀照といふ範圍まで擴大してみても、靜觀的といふことが屢々いはれるけれども、それがややともすると、靜觀的といふよりは寧ろ人生迴避としての自然觀照、或は自然彷徨者としての山登りといふ風にはかり解される惧れがありはしないか。自然を彷徨的な人生の對稱とのみ見る人達に、假令いささかの自己僞瞞的な感傷が存在しなくとも、その人達の自ら感じて自然の深奥となし無邊となすところのものが、案外に淺薄で狭小なものである場合は更にこの危険は注意する必要があるであらう。そして若し、精神的にも肉体的にも健康を必要とする現代青年の、登山の時代的意義、或は更にその社會的な倫理的基礎といふやうなことをも考察すべきであるとすれば、尙更私達はかかる傾向に注意すべきではないであらうか。

登 山 家

「荒船と神津牧場」を書いた大島君は、同時に、我國登山界に於ける新しい分野の一つである冬期登山の開拓者の一人であり、その發達に對しては絶大な貢獻を寄與した研究者であり、更に驚異的な登山記録を貽した登山家であつたことを知らなければならぬ。また、あの様に深く秩父に生きた田部さんは、最初から秩父を知つてゐたのではなく、長年月に亘つて多くの高山に初期の足跡を残した經驗をもつてゐる登山家であることを忘れてはならない。この事實を考慮の外に置くことは危険である。少くとも、私達、未だ若くして山登りの經驗の甚だ少い者にとつては。

又

旅行家は必しも登山家ではない。此に反して登山家は多くの場合旅行家でもある。しかし、登山家が同時に旅行家でないことは、少しも登山家として恥辱ではない。登山家は先づ登山家であることを必要とする。

紀行文に就て

唯單に書くことのみを目的にして山へ行くことは、(それが案内記でもない限りは)實につまらないことである。けれども山を登つて来て、それを記録に止めておくことは、それが如何なる形式のものにせよ、決して無駄なことではない。——それは自分自身のためにも、更に後の人のためにも。

嘗て私は、山登りは全くその人自身に屬するもので、それを他人に示す必要は少しもないばかりでなく、寧ろ紀行文や登山記を貽すことは、不純な輕蔑すべきことであるとさへ考へてゐた時代があつた。だから、その頃私は、私自身では決して登山記などは書かなかつたし、登山に際して時間的な記録をノートに止めることをすら敢て爲さなかつたこともあつた。しかし今では、この様な考へ方は、偏狹といふよりは寧ろ謬見であるとさへ思つてゐる。勿論、文章を草するといふことは才能の問題で、下手な紀行文なんかなら書かない方が遙かに經濟だし、(筆者にとつても、讀者にとつても)書くことが不得手な人や嫌な人は、少しも書く必要はないし義務もない譯だが、しかし正確な數字的な記録だけは、貽しておかなければならないと思ふ。私達は先輩のさういふ記録でどれだけ便宜をうけてゐるか解らないし、後から行く人達への義務でもある。さうして旅行記といふ様なものも、出来るだけ書いておいた方がいいと、私は現在では考へてゐる。紀行文なんかくだらない、と輕蔑して了ふことは、いけないことだと思ふのである。

先 輩

私達は、常に、自分ひとりの力で山登りが出来る様になつたといふ我儘な考へに陥り易い危險をもつてゐる。最初から

全く自分ひとりで山登りが出来るものは、天才か（ウインクラーの如く）然らずんばニイチエあたりの影響をうけた利己的な個人主義的な妄想家であらう。勿論、我國に於ても、現在の「日本山岳會」の古い人達の如き初期の登山者らは、たしかにその人達自身の力で登つたに違ひない。だから私達は、その點に就ても、その様な先輩達に對する尊敬の念を更に深める譯だ。しかし、少くとも、私達の年輩から後の者は、何らかの形に於て先輩の恩恵を蒙つてゐる。私達が、直接の或は著書のうへでの多くの先輩達に對して、感謝と尊敬をもつ義務があるのはこの爲である。仲間や後輩への尊敬と友情は、恐らくこの先輩に對する感謝と尊敬の念に正比例するであらう。私は、私自身を顧みて、その様な自惚から自己僞瞞に陥つたことはなかつたであらうか。

——一九二八・七・三〇——

さまよひ歩きて

わが途ゆく行手を

霧と月光と朝の光りが漂ひきそふ。

そしてわが歩みは黎明の微光のなかの

眠りつゝ立つ冬の森の高きにと滑りすゝむ。

そしてそれとともに、わが彷徨の夢を充たすは

わが遠き故郷。

——ルドルフ・カウシュユカ——

全く自分ひとりで山登りが出来るものは、天才か（ウインクラーの如く）然らずんばニイチエあたりの影響をうけた利己的な個人主義的な妄想家であらう。勿論、我國に於ても、現在の「日本山岳會」の古い人達の如き初期の登山者らは、たしかにその人達自身の力で登つたに違ひない。だから私達は、その點に就ても、その様な先輩達に對する尊敬の念を更に深める譯だ。しかし、少くとも、私達の年輩から後の者は、何らかの形に於て先輩の恩恵を蒙つてゐる。私達が、直接の或は著書のうへでの多くの先輩達に對して、感謝と尊敬をもつ義務があるのはこの爲である。仲間や後輩への尊敬と友情は、恐らくこの先輩に對する感謝と尊敬の念に正比例するであらう。私は、私自身を顧みて、その様な自惚から自己僞瞞に陥つたことはなかつたであらうか。

——一九二八・七・三〇——

さまよひ歩いて

わが途ゆく行手を

霧と月光と朝の光りが漂ひきそふ。

そしてわが歩みは黎明の微光のなかの

眠りつゝ立つ冬の森の高きにと滑りすゝむ。

そしてそれとともに、わが彷徨の夢を充たすは

わが遠き故郷。

——ルドルフ・カウシユカ——

憶ひ出で深かりしヒユツテンレーベン

— ノールウエーの記 三 —

廣 田 戸 七 郎

二月廿七日 ヒユツテ第三日目

朗らか空は、靜かにヒユツテの足元から明けて行く。

今日も亦幸福とそして慰安の一日が私達に巡つて來た。

飲み放題に出される牛乳だけは有難かつた。例の魚攻めの朝飯に舌鼓みを打つて居る際に、昨日の大會で足首をいためたレスリガアード君の代りに大工本職のケールベルグ君がヒユツテへやつて來てくれた。今日から漸く思ひ通りのコーチを受けることになつた譯だ。實際監督は此日一つの重荷を下ろした感じがした。

明後日は愈々ホルメンコーレンの大競技會の第一日だ。

私達は早速ケールベルグ君を捕へてワツクスの塗り方を

習つた。私達には、本當にどのワツクスが、どの程度まで有効なのか、どんな風に塗るのかといふ本當の使ひ分けが判らなかつた譯である。オスローで買込んで來た十何種かのワツクスを皆ケールベルグ君の前に揃へた。彼もよく買ったと驚いて居た。そしてワツクスの種類には随分種々あるけれど、要するに多くの場合使はるゝのは、オストビューのミツクス、メデイウム、クリステルなどで、是等のコンビインの如何によつて、選手の成績に影響する處があるので、結局それが各選手の奥儀となる點である。

丁度私達がコーチを受けた日は、お天氣模様は北海道の二月末頃で、朗かな日が續いて而も雪が粉狀の頃と全く似

て居た。氣温は攝氏八度位もあつたかと思はれた。雪温を特別はかつて見なかつたことは誠に遺憾であつた。

ケールベルグ君のワツクス手ほどきが間もなく始つた。

ワツクスを塗る前に揮發で綺麗に古いワツクスをとる様に言つた。そして尙堅くとれにくいものは、ナイフでゴシク削つて取つた。ナイフで思ひ出したが、ノールウエーの一流處と言はず、ランナア達は大概腰のバンドにセイラーの持つ様なナイフをブラ下けて居る。どうも之はセイラー達の使用からスキーランナア達の使用に轉じて來たものらしい。長さが五寸位はある。ジャツクナイフ程に大きいやうでもない。之でワツクスを削つたり延ばしたり、又時々は松の小枝を切つたり、リングや梨の皮剥きにもなるのである。

スキーの裏が綺麗になつてから、オストビユウのクリステルを取り上げて、先の反りの本から厚さ五厘乃至一分位にベツトリスキーの裏一面に平に塗りつけた。そしてそれを暫らく（一通り寒氣に觸れさせて慥か五分か十分も）間を置いて、その上からミツクスをゴシク塗りつけてクリステルとミツクスをコネ合せた。そして暫らく寒氣に當て、

三〇分か一時間後に練習に出た様であつた。

一通り説明と實際を教はつてから、皆で眞似てやつて見たがナカククリステルを平均の厚さでスキーの裏一面に延ばすことは、可成りのアルバイトであり六ヶ敷いことを皆が言ひ合つて居た。

皆がワツクスを塗り上げて終つてから、一時間ばかりしてケールベルグ君は先頭に立つて、トレーニングに出かけた。下り登り平地、思ふ存分滑走を樂しむことが出來た。

雪の良いことが何よりではあつたが、ワツクスの効果斯程なるはなしと形容したい位、今日習つたワツクス塗法が効を奏したのであつた。ヒユツテへ歸つて來てから何籽位滑つて來たかと聞くと二〇籽近くはあらうと云ふ話だ。

それを兎も角そんなに廻つて來たとも思へぬ程樂々と皆が廻つて來て居た。自分には餘りデイスタンスの距離の觀念が少かつたから十二、三籽かと聞いて笑はれたけれど實際それ位を廻つて來た程度の疲勞鹽梅であつた。僕がそれ程だつたからデイスタンス専門の連中は誠に樂なものであつたと思はれた。

此日監督傑作の卷があつた。

誰かゞ此話を以前東京の或新聞に書いた相だが、連中と一緒に出かけた監督が途中で用、足しをして居る間に一行を見失つて、ノールウエーの山中で迷兒になつて終つたのであつた。スプールをたどれば判り相なものぢやないかと言はるゝの御尤もではあるが、そのスプールが餘りに山中縦横無盡について居て、流石に見分けがつかなかつたのであつた。でも一行のスキーの大きさ、巾さは、特徴があつたので離れてから暫らくは傳つて行つたけれど、とう／＼見失つて終つて、一人タンネンの森の中を二時間餘も彷徨して此間叫びもし、呼びもしたけれど遠くで受答へがあるばかりで、遂皆と出會し得ずに終つた。然し心細いとも思はずに森を抜け出て見晴らしのきく平地で漸くヒュツテへ行く指導標を見出すことが出来て、全く喜んで之の矢の示す方向へ道をとつて、登つて夕方ヒュツテへたどり着いた時は生心地がした。彷徨の時々には、皆に迷惑をかけて濟まんと時々思つて、腹の減つたことなど忘れて、たゞ／＼ヒュツテへ一刻も早く着かねばならぬと力み續けた。

ヒュツの指導標が命の親となつた譯である。スキーに出かけてノールウエーで死ぬのも本懐かも知れないが、日本

の監督がノールウエーの山中で道に迷つて迷死したと言はれては、日本の体面に係るぞなんて言ふ氣持になつたり、可成りその時の私の心の中は複雑であつた。

とう／＼監督が遅れちやつた爲に、ケールベルグ君に挨拶も出来ずに終つたことは全く濟まなかつた。

かくして其一日のトレーニングは夕暮と共に終つた楽しい晚餐が一行を迎へてくれたのは夜の八時頃であつたヒュツテの外はもう大分暗い。窓外に遠く明滅するオスロ一の街の明りが、言ふに言はれぬ感じを持たせた。

屋内の食堂はもう後片附けがすんで、蓄音機がうなつて居る。フィンランドの選手連や、ノールウエーの連中が踊り廻つて居る。西洋の若い連中は誰も踊れるものかと思つて居たら、やつぱり踊れぬ者もある様だ。片偶みの爐邊で黙して見て居るのも可愛らしい。明後日の一年一度のホルメンコーレン大長距離レースも何處であるやらと言つた様な調子で大はしやぎだ。かうした情景はちよつと日本には見られぬことだと思つた。

七月廿八日 ヒュツテ第四日目

全く明かだね、と皆が思ふ程お天氣が又とても良い。

誰かゞ此話を以前東京の或新聞に書いた相だが、連中と一緒に出かけた監督が途中で用足しをして居る間に一行を見失つて、ノールウエーの山中で迷兒になつて終つたのであつた。スプールをたどれば判り相なものぢやないかと言はるゝの御尤もではあるが、そのスプールが餘りに山中縦横無盡について居て、流石に見分けがつかなかつたのであつた。でも一行のスキ一の大きさ、巾さは、特徴があつたので離れてから暫らくは傳つて行つたけれど、とう／＼見失つて終つて、一人タンネンの森の中を二時間餘も彷徨して此間叫びもし、呼びもしたけれど遠くで受答へがあるばかりで、遂皆と出會し得ずに終つた。然し心細いとも思はずに森を抜け出て見晴らしのきく平地で漸くヒユツテへ行く指導標を見出すことが出来て、全く喜んで之の矢の示す方向へ道をとつて、登つて夕方ヒユツテへたどり着いた時は生心地がした。彷徨の時々には、皆に迷惑をかけて濟まんと時々思つて、腹の減つたことなど忘れて、たゞ／＼ヒユツテへ一刻も早く着かねばならぬと力み續けた。

ヒユツの指導標が命の親となつた譯である。スキーに出かけてノールウエーで死ぬのも本懐かも知れないが、日本

の監督がノールウエーの山中で道に迷つて迷死したと言はれては、日本の体面に係るぞなんて言ふ氣持になつたり、可成りその時の私の心の中は複雑であつた。

とう／＼監督が遅れちやつた爲に、ケールベルグ君に挨拶も出来ずに終つたことは全く濟まなかつた。

かくして其一日のトレイニングデーは夕暮と共に終つた楽しい晚餐が一行を迎へてくれたのは夜の八時頃であつたヒユツテの外はもう大分暗い。窓外に遠く明滅するオスロ一の街の明りが、言ふに言はれぬ感じを持たせた。

屋内の食堂はもう後片附けがすんで、蓄音機がうなつて居る。フィンランドの選手連や、ノールウエーの連中が踊り廻つて居る。西洋の若い連中は誰も踊れるものかと思つて居たら、やつぱり踊れぬ者もある様だ。片偶みの爐邊で黙して見て居るのも可愛らしい。明後日の一年一度のホルメンコーレン大長距離レースも何處であるやらと言つた様な調子で大はしやぎだ。かうした情景はちよつと日本には見られぬことだと思つた。

七月廿八日 ヒユツテ第四日目

全く朗かだね、と皆が思ふ程お天氣が又とても良い。

愈々明日がホルメンコーレン大長距離競技とあつて、今朝は早くからヒユツテに居る連中は屋外に出て古いワックスを削り落して居る者、ランプでコテ／＼のワックスをスキーに吹きかけて居るもの、メデウムとかミックスとか、クリステルとか塗つたり落して見たりして居るもの、様々である。さうしてスキーにワックスを塗るのが一段落つくと二、三籽ばかりを走り廻つて来ては、盛んに試験をして居る。僕達仲間も他の連中に伍して僅か一籽ばかりの處を競走して居たりして居たが、やつぱり一目置かざるを得ない様な状態らしい。

フィンランドの連中も、今日は休養して居る様だ。お天氣廻りは、明日も今日と大した變りはなさ相だ。だから今日ワックスが有効であれば、明日は相當確な成績がとれるんだと言つた様な顔をして居る連中も居た。

私達の本當に依頼したかつたレスリガード君は、先日のミッドストウエムの競技會で、最後に飛んだ時足首を痛めたと言つて、すつかり閉口して居た。少しも都會慣れした様な處もない全く純朴な彼が、折角のホルメン、コーレンの競技の迫つて来て居る今になつて、悲しくも痛手に堪え

ねばならぬことは、何としても氣の毒でならなかつた。

ヒユツテの外のベンチに腰かけて、私とフィンランドの監督と三人で話し合つた。

慰むる言葉にレスリガード君は感謝の内に笑をたゞへて居たけれど、彼の胸中全く推量に餘りあつた。彼は丁度ハウグタイプの方で、未だ廿六才と言ふけれど、已に／＼私などの親爺位に見えた。私は多角的な彼の顔貌としてハキ／＼した物の言ひ方と、スポーツマンらしい態度がとても好きになつた。

私はフィンランドの監督にラツバライネンの身の上話を少し聞いた。それによると、彼は少年時代にスキーなどやつて居ないらしい。何でもスキーを始めてから未だ五六年位だと言つて居た。そして今迄は夏冬かけてアルバイターの生活をして居た男らしい。だから体はとて良い。

監督は尙語つて聞かせた。彼はさういう風に良い空氣を吸つて自然の中で鍛えて来た体を持つて居るから健康なんで、たま／＼スキーを穿いて競技を覺える様になつたのが今日の彼を作つたと言つて居た。そして今は彼はラハチーの或スキー製作所の顧問になつて居ると言ふことである。

しきりに私に私達一行が三月十七日のラハチーのスキー大會に來ないかと勸めてくれたが、もう一行には競技に出るだけのスキーの持合せもないし、又もうロンドンの郵船の方へ船で歸る交渉をして居たので誠に遺憾であるけれども言つて斷つた。

夕方になつてから、フィンランドの連中はスキーのワツ

クスをすつかりランプの火でとかしてスキーの裏を綺麗にして保存木をはさんで締くゝつて居たやうであつた。
日が暮れてからは流石に今日は蓄音機の音もせず、早くにヒュツテの静かな夜が訪れた。

私には其夜どういふことがあつたか少しも知らずに深く寝込んで終つた。

伊藤秀五郎詩集

「風景を歩む」

三百部限 定價 金 貳 圓

本會々員伊藤秀五郎君によつて編まれたる此の良き詩集を諸君に薦む。

發賣元

東京市麴町區下六番町四八

厚生閣書店

振替口座東京五九六〇〇番

灰色の恐怖

Das graue Grausen

こゝではわれ／＼は最も高い人間だ。そしてまた最も幸福なものなのだ。——われ／＼ふたり、君と僕とは。

ぐるりをとりまくは、みな、よろこばしい、力強い山々の顔。なんとその純白な雪の斜面やシュネーフエルドが夕日の落光に耀いてゐることか。そしてまた、陰影さした、まつくろい岩壁。——それのなんと威嚇的にみえることか……………。

山が山へとうちつゞいてゐるのを、われ／＼は眺めわたす。なんとそれらの山々は、いま沈みゆく太陽にくらべみて、この神の巨大な火球におのづから服従して、より小さくみえることぞ！

はるかはるか、まつたく遠く、山々が丘と低まり、平原とまでうつるところ、くらい森の董色のなかにあるひとつ

の蒼白い斑点……………それは灰色の恐怖。

黙つて私はその斑点と對話をとりかはした。

それはなんと私に言ひかけるのか？ 「私は人間の住むところなる、町です。そしてこゝはまた嫉妬、復讐、憎悪の住家です。

「いや、もうそれ以上言ふのは待つてくれ給へ……………二二分間の後には、また私も君のところへ再びかへるためにこゝを立たなければならぬのだから。」

——ハンス・モルゲンターレル——

老登山者の回想

氷河のうへの月夜。銀色のフィルンからやはらかな波のやうに斜面は斜面に、丘は丘に波打つて、白い無限のなかへと山々の側面をのほつてゐる。そしてその白い斜面のうへを、私の風にすぐと吹き消されてしまふ、小さなシユブールと、私のラテルネのゆらめく、小さな、あたゝかい光りが、より高く、ますます高く、銀色の丘をこえて白い無限のなかへとほつてゆく。太陽。その千倍にもなつて耀き、きらめく雪のうへに燃える光り。風はボッセのアレートのうへで口笛を吹いてゐる。射るやうに氷の粒が私の頸や顔に焼きつける。小さな裁痕から私のピッケルが搔き裂く氷片がまるで飛ぶやうに斜面を落ち運ばれてゆく。谷も森も、氷河も、頂も私の足下にと沈んでゆく。純白のなかへらひとつの壁がたゞ清浄にかゞやく青色を通して、より高く、より高くなる。ほつてゐる。

白い山々の幅廣い頂の圓屋根のうへにたゞひとり。たゞそこには風の聲が住んでゐる。吹き荒れる嵐が私を追ひ立てる。私は谷にある人間と愛とを見棄てた。吹き卷く雪の粉末が、頂の白い覆布のうへに私の足が刻み印したシユブールを忽ちにかき消してしまふ。尙ほ日が沈む前にまだ人の觸れない白い無限のうへに風は吹くことだらう。そして年はまた私の想ひ出の足痕を消すためにも、冷たいあの雪のやうにやつてくることだらう。

いまはしづかな歡聲としづかな寂しさが聲低く老ひしものに耳語する。それは何處からか——そしてそれは何處へか。……

——ギトオ・オイゲン・ランメル——

ロツグケビン及びカッターチ

其の建築法、造作、飾付及び家具の造方

伊 藤 虎 夫 譯

或る現代の人類學者は文明人に依つてたしなまるゝが如き——銃獵、釣魚等の如き——狩獵の悅樂を目して「原始的野蠻が近代文化に遺した痕跡」として述べて居る。此の説にして多少なり共、眞とするならば、著者は蠻人たる事の

素質を多分に有して居る事を自由する。森林生活を營むだ積年の歸依——宗教的偏信者のみが持つ所の歸依——無かりせば此の貧しき書物さへ著作しはせなかつたであらう。著者はキャンプ・ライフを愛好し、其の悅樂を増大せしめむと欲すが故に、此の小巻を書いた著者の意圖は「原始的野蠻の痕跡」を發見し得る多數の讀者に依つて會得せらるゝ事と確信する。本書の主題即ち「丸太小屋及び田舎屋其の建築法、造作、飾付、家具の造方」は専門的また余りに實際的であるかも知れぬ。然し乍ら麗しく、かぐはしき

香りの花又は甘味の果實は皆その根を地中に下して居るが如く、總ての高尙な而して更らに倫理的快樂及び便益は實際と謂ふまた専門的と謂ふ地下に根ざして居る文化の中に存するのである。

森林に歸還し度いと言ふ慾望中に、若し非文化的狀態の要礎を見出す共、蠻風もつて森林に行かねばならぬと謂ふ理由にはならぬ、都會生活の近代的代表者は森林中に在つて蠻人の如く、洞窟に生活する事を夢想してはならぬ。亦「勇敢なる兩足動物」樹上に棲む習性を持つ「彼緣遠き物を裝ふ可く企てゝはならぬ。人間が原始狀態の痕跡をたどり、野蠻より文化に來りしが如く、彼は文化の或る痕跡を「原生林」に引戻さねばならぬ。吾々と緣遠き祖先との間には確然たる相異がある。彼等は洞窟に生活し、必要上狩

獵をなし、魚を釣つた。他の方法に依つては彼等は生活を營むすべがなかつた。吾々は森林に轉住し、好むで山岳に攀ぢ登り、選り好みの上狩獵し、魚を釣る。吾々は變化、回復、悅樂、健康の爲に行くのである。吾々は文化の緊張を更らに良く支持する爲に精力を蓄積す可く志すのである。健康は命令的である。文化人は多くの點に於て類似して居るのであるが、森林生活を欲するものである。

キャンプの構造は一時的と恒久的とに區別す。一時的の物には各種の様式のシエルターが在る。恒久的の物即ちシエルターよりはるかに耐久的材料即ち石材、丸太、扁板、屋根板或は樹皮等の如き物を以つて建造せられしものを謂ふ。

キャンプ用の材料の選擇は大部分趣味、費用または便益の諸點に依つて選定せらるゝ。著者の判斷にして誤りなくむば、丸太に優る材料は無い。如何なる小屋も丸太にて造られたる小屋以上に氣持の善い事はないであらう。丸太小屋及びその家具は出來得る限り其の附近にて穫られ得る材料を用ひて造らねばならぬ。

キャンプのローケーション——キャンプの位置は健康、趣味、愉樂及び利便等に就き充分考慮を廻らしたる上選定せられねばならぬ。保健と謂ふ主要點よりして、總ての建物は濕地又は沼澤多き地域を避け、高燥の地を選び建造す可きである。良飲料水は一時も缺く事を得ない。溪流に接近せる位置がよく、然らざる時は泉を有するか或は地中に貯水槽を設備し常に良飲料水を貯へ置かねばならぬ。湖畔にキャンプ地を求むる場合には、避難場を有する灣曲せる岸が適當である。水中は舟を浮べるに充分深く、同時に遠淺で時には砂岸にて水浴がとられ而して水浴の前後には軽い運動が出来る、相當の距離の廣さを有する砂原であつて欲しいものである。

一のキャンプ・サイトを選擇するに當つて好き眺望を無視する事は出來ない。スポーツ・インク・インク・インクを以て未開の遺物と看做し、風光を愛づる情操は文明人が有する獨特の性格の一なりと説き、亦人間が森林山岳、湖沼、海洋及び雲を夫等個有の美しさの爲に愛する事を識るに至つたのは爰二百年以後の事であると述べてゐる。(譯者註。これは歐米の事である。) 今日でも雄大なる風景に



シエヌングス・ヒユツテの丘にて

對する嗜好は二、三の種族に限られ、然も夫等の内にも比較的極小人数に制限せられて居るのであると附言してゐる。

先づキャンブ・サイトを大體選定したる上は次ぎに其の地位を立體的に細密に研究する事である。即ち其の敷地の前後の土地及び景色が素晴しく又見通しがきくかどうか注意する。繪を描く前の如く研究する。その敷地及びその環境に從つて建築設計圖は引かれねばならぬ。實際、建造物はその結果であらねばならぬ。敷地に調和混一するやう、工事完了の上はその四圍を調へ而して美化する。然る後其處を眺むる時音楽に於ける階調、或は詩に於ける律動と同様な心好き効果の生ずるを見るであらう。此の故に設計圖の選擇には種々なる困難が伴つて居る。各人が着丈の合つた而してしつくり體につく着物を必要とする様、各建築敷地も完全に適當した小屋又は田舎屋が建てらるゝやう充分考慮せらるゝ事を要する。最上の効果を擧げるには森林知識に精通した専門建築家の援助を必要とする。彼にその敷地及び環境を詳細に話す事である。勿論彼と連行して敷地を見聞し測量する事は更に善い。而してその設計圖作製

に寛大に謝禮を與へよである。それは普通の作圖費より多少率に於て高價であるかも知れぬ。専門家にやらせるなれば小さな數々の希望も、亦一寸した思付も或はどんな風に完成仕度いか及び費用の點も詳細に話す事である、勿論費用などは問題にない場合は。夫れだけ仕事は容易でまた理想的に完成せられるのである。

杣打ち及び仕事の準備——設計圖に從つて建物の面積通り杣を打込む。然る時は整理を要する周圍の土地の距離が分る。建物への通路に當つて邪魔になる樹木のみ砍り倒すに止め他は其の儘にす。然し乍ら枯木、朽樹は直ちに砍り倒さざれば暴風一過、新造の小屋は朽ちた巨木の下に唸らねばならぬであらう。

若し出來得るなれば小屋は南東あるひは眞南に面して建てらる可きである。

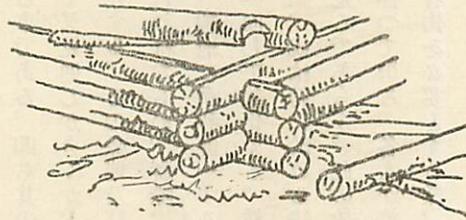
基礎工事——工事は注意を要する。野營の附近にて見出される最上の材料を得ねばならぬ。若し杭棒を用ゆる時は松、つが、落葉松、或は西洋杉の直径八寸乃至一尺の強固なる木材を選ぶ。堅樹は善いが耐久力が無く、材としては

前記の「つが」が最上である。

杭棒は長さ五尺位に砍られ、深さ三尺以上探掘した穴に植込まねばならぬ。この杭棒の下端は岩の上若しくは固き土壤の上に定着せしめねばならぬ。建物の各隅、各稜角

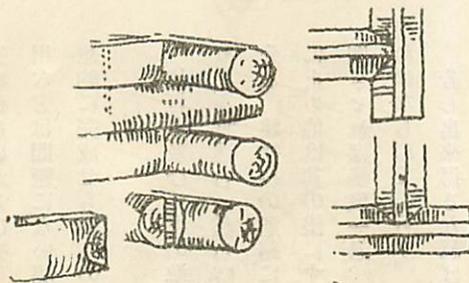
の下末端、邊端の下部にも夫々杭棒を打込まねばならぬ。例へば縦廿尺巾十二尺の長方形の建物が在るとする、其の廿尺の側の兩稜角間の下方には二本、巾十二尺側の下方に一本の杭棒を必要とする。是等の杭棒が適當に配置されたる後、先づ最高の地面に打込まれたる杭棒に、地上一尺の所に標を附し正しく直角に切去る

此の標を基準にして他の杭棒を水平に標付をなし而して完全に水平なる基礎を定め然る後先づ第一列の丸太より切去るのである。



(第二圖)

杭棒を總て同高に切去るは丸太が第三圖に示すが如く、第二式に従つて積重ねらるゝ場合に適應せらるゝので、第二圖に示すが如き場合には總てを同高に切去る事をせず、第一様式即ち銚仕口 (Hochform) に丸太を積重ねる場合は夫



(第三圖)

れに應じて杭を切去るを要する。故に銚仕口を採用する場合は建物の角稜の杭を除き他の横側列の杭は三寸五分餘り高目に或は使用丸太の太さの半徑の所にて砍るを要す。但し丸太の兩末端の木口は多少太さを異にする故に、夫れに準じて寸法も多少相違を生ずるのである。杭棒を地上一尺の所にて砍るは床下の通風を善

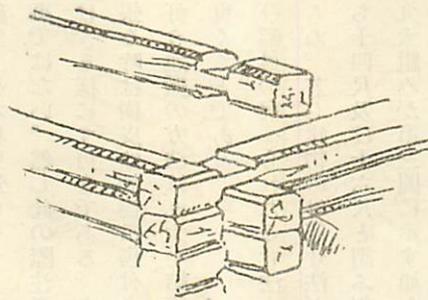
くする爲である。基礎土台に石材を使用する場合には、直徑二尺以上深さ三尺以上の穴を掘下け、小石又碎岩を詰め而して固め地表

と同高にする。然る後大栗石を集め揃置き、各間隙に小石又は岩にて塞ぎ座りを良くせねばならぬ。この栗石若しくは項石は最初の丸太を水平に横はらしめるやう、又充分地上より高く而して確保せられてなければならぬ。

若し堅地なれば大なる

石を土台として、單に地上に据置くのみにても善し。實際はこれが普通の仕方である。若し建物の下に穴藏を設くる時は堅固なる土台を必要とするは無論の事である。穴藏の壁は一尺五寸以上の厚さを要し、附近にて求め得らるゝ格構の石を積重ねるのである。煙筒の項目に於て詳述するであらうが、兎に角モルタルを使用して固めねばならぬ。

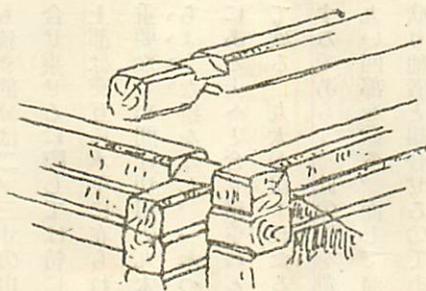
用材の選擇——建築に最も適する丸太は眞直で、堅固で而して太さがなる可く均一してゐる事である。此の丸太は



(第四圖)

直徑五、六寸乃至八寸位の物を使用する。樅、松、つが、落葉松及びバルサムが最適の材である。硬材は此の目的には適するが非常に重いので扱ひ憎く、特に生木の場合は一層甚しいものである。若し眞直なれば樹木の項部は桷又は根太として役立つであらう。

らう。



(第五圖)

先づ最初に注意を以つて用材の數を算出して書出しを作る。夫れには各々の長さ、太さ及び使用個所を明記する。

アデイロンダツク地方にては五月の初めより七月の終りにかけて

樹皮を剥ぐ、遅れても六月中には大低しめり勝である故此の間に樹皮を剥いで置く。若しその儘剥かずに放置するも、何れ晩秋或は冬季に剥かねばならぬ。粗野な樹皮の附いた丸太小屋の外観は氣持の善いものであるが、樹皮を剥

いだ滑らかな方が虫が附かず善い。

小屋及び田舎屋の建造に適する月は地方に依つて異なる。降雪に關係するのである。地方に依りては十二月後は積雪多く又吹雪き勝である。十、十一、十二月中なれば十二月後も然うであるが、積雪上を木材曳張りキャンブに運搬するはさして困難なる事ではない。然し此の際注意すべきは樹皮をなる可く傷付けざる様にす可きである。丸太の末端に鎖を巻き付け、曳張る時は樹皮は無慘に傷付き損じ見る影も無くなる。最も好き運搬の方法は丸太を結束して、いかだを造り、橈の如く曳くことである。

總ての丸太は建物の縦及び幅員の與へられたる寸法より二尺許り長目に鋸かねばならぬ。若し建物の外側寸法が十二尺及び十四尺なる時は即ち十四尺及び十六尺と謂ふ割合にて挽かねばならぬ。然し丸太組みが第三圖に示す如く行はるゝ時はこれは適用せられない。斯かる場合には建物の外側に延びる方の丸太の一端のみである故、一尺増せば宜しいのである。丸太が挽かれたる場合、其儘積重ねる時はむれたり土まびれになるを防ぐ爲に二本の丸太即ち滑材の上積上げ置く、此際長さ、太さに依つて區別して置き、

直ちに検査し又は使用せられ得る様に整頓して置く事である。最も丈夫にして大きく而して型好きな物を下梁或ひは積重ねる最初の鬮とする。是等の丸太の上部は、ちよ、うな又は斧にて端より他端迄直線に平滑に砍る。斯くする時は最も狭き部分は二、三寸の中である。土台石又は杭棒に鬮を合せ乗せるに際しては特に注意を要し、削られたる面又は上部は交互に水平に在らねばならぬ。建物の側面又は餘り重要ならぬ間仕切用の丸太の總ては、上下兩面共に平滑にちよ、うな掛をなし、一本づゝ其の都度なし既に所定の位置にある上へと合せ積重ねるのである。錠仕口又は角は斧にて砍る。丸太が組まれたる時は平滑な面はキツチリと密着するであらう。此の錠を造るには丸太の下部にV字型又は丸い凹部を砍る。而して前者の方は上部に反對にA字型に砍り他者と組合せるのである。良く咬合ふ迄は再三再四取り外して斧をかへねばならぬ。

錠仕口に依る建物の枠仕事の組立に當つて困難なるは各層の縦及び横丸太に高低が出来て仲々巧く行かぬ。或るウツツメンは此の問題を第三圖のスケッチに示すが如く木材を枠組にして嵌め合せして見事に解決した。斯くの如く丸

太が積み重ねられて行く時は各層は下方の層に目釘を打ち付けてゆかねばならぬ。これを成すには一寸四分の一の螺鑽にて下層の半部迄孔を穿ち而して硬材製目釘を孔に打込み丸太を定着せしむ。

丸太の建物には屢々荒削りの角材又は矩形の材を用ひて造ることがある。これは瑞西或はノール風である。此の場合には用材の片隅に刻込を付ける。

最初の丸太の一層が置かるゝや、柄穴まじ即ち凹部を作り而して床の枕材を差渡す。根太の頭部に付きては後節に於て記述する。

さて丸太を太き端と細き端とを交互に積み上げゆく、斯くして壁面は格構よく統一されたる外觀を呈するのである。窓、戸口等に對して確定的に特別の計畫をせず、丸太の最も貧弱なる部分を切開き、其處を窓となし又は戸口とすることもある。

窓及び戸口の高さに達したる時、鋸にて挽き是等の爲に所用の餘地を遺して積重ねてゆくのである。この開放口が出来れば建物の内外にて仕事をなすに便利である。戸口及び窓枠を作り嵌め込み、各層の丸太の小口に釘付にして定

着する。

二階の床の高さに達したる時は、床板用の根太を枠組して置き、而して再び丸太を積上げゆき、桷たきを受くるに適當なる高さに至る迄續けるのである。二階の窓等も既に記述せる如くならず。(續く)

Log Cabins and Cottages: How to Build
and Furnish Them, by Wm. S. Wicks

山
と
ス
キ
ー

第七年 總目錄

自一九二七年七月 第七十三號
至一九二八年七月 第八十三號

札幌 山とスキーの會 發行

山とスキー第七年目次

(自一九二七年七月第七十三號
至一九二八年七月第八十三號)

論 說

グライトスブルングと

そのシャンツェ築造上に及ぼす影響に就て

小杉 林辰雄 著
杉山 又雄 譯 (一)

登山史上の人々……レスリー・ステイブレン小傳

大島 亮 吉 (五)

登山家の馴化に對する一考察

岡村 源太郎 (八)

スキーワツクスの科學的考察

齋藤 省三 (一九)

近代的シャンツェの構造

木原 均 (二四)

氷と雪の理學的性質に就て

加納 一郎 (二九)

樺太東海岸突岨山の植物

平塚 直秀 (二九)

登山史上の人々

大島 亮 吉 (二四)

登山史上の人々

大島 亮 吉 (三八)

九重火山郡の植物景觀概要

竹内 亮 (三三)

ス キ ー 術

スキーテクニツクの研究

廣田 戸七郎 (一)

スキーワックスに就て.....	岡村源太郎(一〇)
各大會に於けるジャンプの記憶.....	伴素彦(一八)
ダウエルラウフの練習日記.....	宮下弘三(二六)
スキーテクニツクの研究.....	廣田戸七郎(二二)
ドイツスキーランナーの練習に就て Aus D. münchner medicinische Wdhenschrift	廣田戸七郎(二三)
スキーテクニツクの研究.....	廣田戸七郎(二四)
クリスチャニヤ・スウイング.....	青木信三(二七)
スキーに對するワックスの手法.....	宮下弘三(二六)
海豹皮の利用に就て.....	伊藤秀五郎(三五)
登山研究・紀行・文苑	
藏王日記...三木茂吉君の死.....	額木田次郎(二四)
天候の智識と山岳に於ける災害.....	Prof. Dr. A. De. Quevran (四)
八溝山.....	岡田實譯(四)
藏王日記...三木茂吉君の死.....	大島亮吉(六)
山を疑ふ時.....	額木田次郎(七)
赤岳ノルドクラード紀行.....	井田清(二三)
利尻山の話.....	D. B. H. 生(二〇三)
	高杉正樹(二三)

天候の智識と山岳に於ける災害

Prof. Dr. A. De Quervain 岡田實譯 (三十一)

トムラウシ岳

板橋卓 (三三七)

北海道の春

伊藤秀五郎 (三三六)

山詩抄

和辻廣樹 (三三九)

五月の針ノ木岳

小池文雄 (三四三)

その他

手稻山を眺める……大正年間十五年のスキ一の思田の一端

岡村生 (一八)

川名のアイヌ語解……特に北海道小岳地方に於ける

山口生 (三)

會務に就て

小川玄一 (三〇)

雑報

山口生 (三)

川名のアイヌ語解……特に北海道小岳地方に於ける

山口生 (六)

不思議な話

加納生 (九)

ゴシツプ

加納生 (九)

雑記

加納生 (一〇四)

スイス便り

加納生 (一四)

岡村君の追憶

中野生 (一四)

源さんは永久に歸つて來ないのか

廣田戸七郎 (一五)

追憶	伴素彦(二五)
源さんの印象	宮下利三(二五)
岡村の源さん	山口壽一(二六)
山と岡村君	山口健兒(二七)
黒いネクタイ	相川正義(二八)
源さん	坂本直行(二九)
サンモリツツへ行く友に	木原生(三〇)
スキー靴をめぐるて	高橋昇(三一)
本道スキー地暇夷語地名解	河野廣造(三二)
ヘルヴェチヤヒユツテの建設	山崎春雄(三四)
第一回インターカレッジ、スキー競技會	平塚直秀(三五)
ヘルヴェチヤヒユツテの建設(二)	山崎春雄(三六)
海外通信	廣田戸七郎(三七)
秩父宮殿下を御迎へ奉りて	廣田戸七郎(三七)
台覽北大スキー競技會	小川玄一(三八)
警備隊の記憶の中より	村本金彌(三九)
青山温泉附近の思出	井出英次(四〇)
海外通信	廣田戸七郎(四一)

大島君を憶ふ……………	伊藤秀五郎……………(三三)
第二回冬季オリンピック大会……………	伴素彦……………(三五)
春の Paradise Hite に於ける Training……………	村本金彌……………(三一)
海外通信……………	廣田戸七郎……………(三七)
第二回國際オリンピックスキー競技……………	伴素彦……………(三六)
オリンピックデーのスキージャンピングを観る……………	廣田戸七郎……………(三九)
スキー使用語釋……………	T O S 生……………(三九)
第十六シーズン北大スキー部々報……………	(四〇三)
オリンピックデーのスキー競技を観る……………	廣田戸七郎……………(四〇五)
ノールウエー行……………	廣田戸七郎……………(四一五)
ホルメンコーレンのスキー大会……………	伴素彦……………(四一七)
寫 眞 版	
オリンピックアシャンツエ……………	山口健兒……………
トムラウシ山よりキブタテシケ山脈を望む……………	山口健兒……………
クロステル・グリユンホルン……………	山口健兒……………
白雲岳より見たる烏帽子岳……………	近澤生……………
サンモーリッツ……………	近澤生……………

オリンピックアシャンツェにて.....	須藤宣之助
鹽見嶽.....	
Blick vom Eigerlescher auf Silberhörnner.....	
ありし日の岡村君.....	
ヘルヴェチヤヒユツテ.....	齋藤丈彦
雪の華.....	
ジャンプ(札幌シヤンツェ).....	吉田世紀
奥手稲.....	大谷生
Trojani君の飛躍振り.....	
第六回全日本スキー選手権大會.....	
秩父宮殿下.....	
ユートピアに於ける御一行.....	
入場式前の日本選手一行.....	
50K. M. ロース途中の永田君—50K. M. 1位Hedlund (Sweden)....	
Sigmund Ränd.....	
十勝より上ホロメトツクを望む.....	
St. moritz附近.....	
Andersenの飛躍振り.....	
サンモーリッツ湖畔.....	
スキーマジウムの前にて.....	伴素彦

岡村源太郎遺稿集

スキーデイズタンスレース

完成
限定五〇〇部

体裁 菊版 三三〇頁 假製綴

紙質 上質紙 寫真版六葉

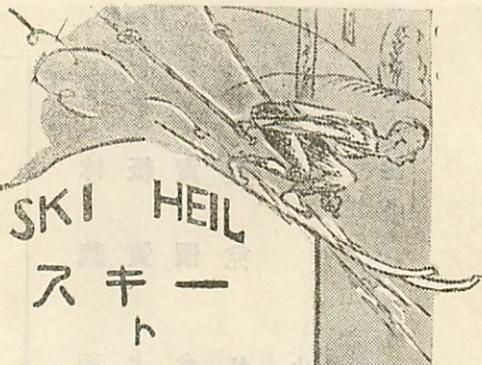
實價 金貳圓

發兌 札幌 山とスキーの會

小樽 梅屋運動具店

御申込は甚だ勝手ですが成るべく小樽稲穂町梅屋運動具店宛にお願い申します。

山とスキーの會



SKI HEIL

スキー
ト

其用與全般

中野商店

スキー即ハバ

第一
級
大
新

札幌



山
と
ス
キ
ー
の
會

GET SUPERFINE SKEES.
 AND MAKE AN
 EXCELLENT
 RECORD!

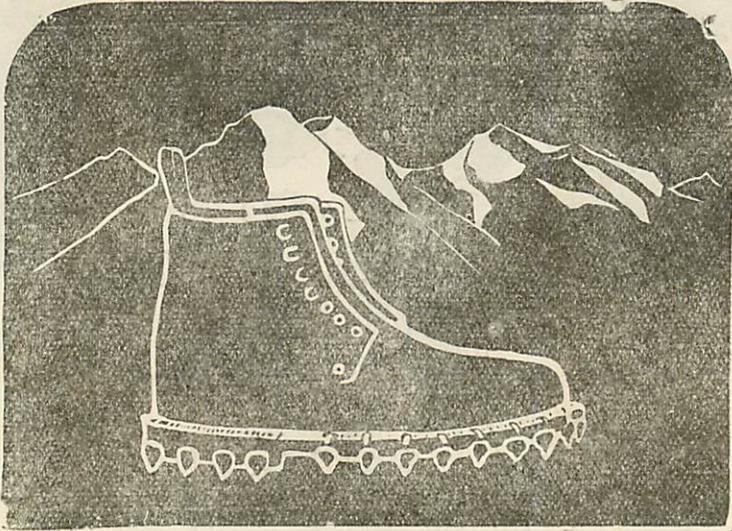


具用其トーキスルナ秀優

樽 小

店 具 動 運 屋 梅

第二回畜産工藝博覽會ニ於テ
一等賞金牌受領



登山靴とスキー靴

東京市本郷區四丁目角

太田屋靴店

電話小石川四七一二番

振替東京六一二七番

◆山とスキーの會は北海道帝國大學文武會スキー部の有志が、此の雜誌を發行する爲に作つてゐる會です。

◆スキーを研究せられる人、登山に興味を持たれる方が一人でも多くお読み下さることをお願いいたします。

◆山岳及びスキーに關して何なりとも御寄稿下されることをお願いします、又印畫の御惠送を切望致します。原稿紙は御申越次第お送り致します。

◆原稿は、。を一字とし、行を更めるときは一字下けること。

◆記事中の數量は全て、O・G・S系によられん事を望みます。

◆雜誌代金に就て一應下記の諸項を御承知下さい。

◆本會より發する電信略號を「ヤマ」として居ります。

◆前金切れの時の御知らせは最後の分の包装中に同封して御送りします。次の御送金あるまでは配本を見合せます。

定 價 金 參 拾 錢

*前金御申込か、現金でなければお渡しいたしません。

*御送金はなるべく振替にてお願致します。

*六册分前金拂込の方には送料を頂きません

*前金の切れた時の御知らせは最後の分の包装中に同封して御送りします。次の御送金あるまで配本を見合せます。

*本誌は營利的の刊行物ではありません。紹介、縁故の有無にかゝらず雜誌の代價は頂きます。

昭和三年九月廿八日印刷

昭和三年十月一日發行

(毎月一回一日發行)

編輯者 小 川 玄 一

印刷兼 發行者 小 川 玄 一

北海道札幌市北一條西二丁目

印刷所 札幌印刷株式會社

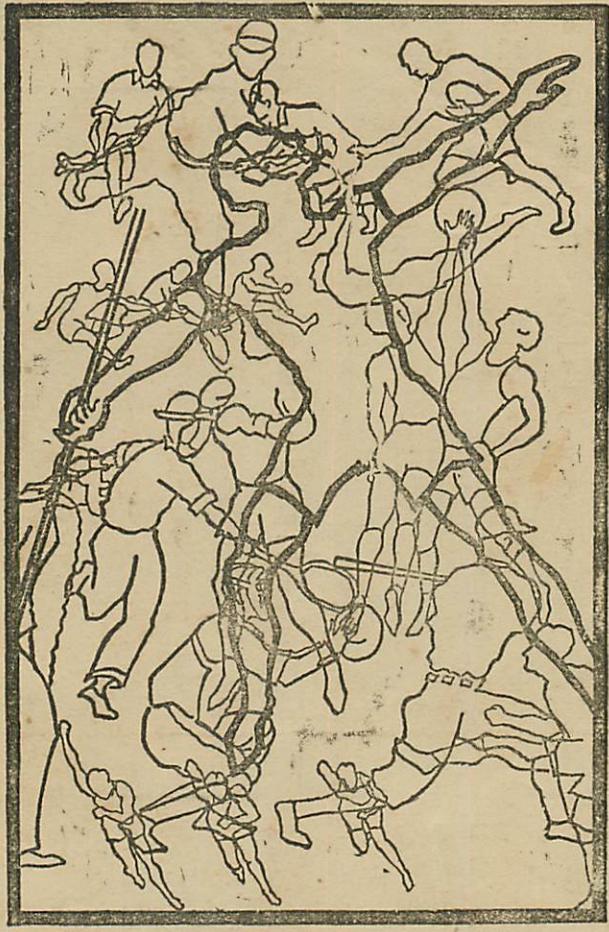
北海道札幌市北二條西十五丁目

發行所 山とスキーの會

振替水構八四九五番

La Gazeto
de la
Monta kaj Skia Clubo
No. 86. Oktobro 1928. Sapporo. Japanujo.

大正三年七月二十七日第三種郵便物認可
昭和三年九月二十八日印刷
昭和三年十月一日發行



山とスキー
第八十六號

美滿津特製
"春より夏へ"の運動具!

合名會社 美滿津商店 東京・本郷
赤門前
電話(小石川) 八四五・二〇七一

定價金參拾錢